トリ目・ウオの目・ちか目はち目 ⑩

～日中友好に橋を架けた郭沫若氏～

福岡女学院大学客員教授
斎藤裕三

わが「トリ目・ウオの目」が、今月で100回目。勝手な話ばかり、100回も書いた人も書いた人だが、読んだ人も読んだ人。筆者に説明責任はありませんぞ。ただ一言どうもご苦労様でした！

これからも、どうか一層のご辛抱を。

時に、日韓関係は「ヨン様」のおかげで良好。オリンピック水泳で金メダルを2個も取った北島康介選手も、「ああ、キムチいい」とか。

だが、北京のサッカー選手権でチラリ見たように、どうも日中関係がぎくしゃくしている。国の関係と言っても、結局は人。愛国者はいても、両国関係の橋渡し役がいないのではないか。

日中関係は、不幸な時代もあった。しかし、底流は兄弟のような友好関係の歴史だった。それは、鑑真や阿倍仲麻呂などのように、両国民の友好に、生命さえ賭けた人があったからこそだろう。

中でも博多に縁が深くて、まだ市民の記憶の中にある中国人といえば、戦前、九州帝国大学医学部を卒業し、戦後も新中国の政務院副総理となり、中国科学院院長として日本を訪れ、福岡でも大歓迎を受けた郭沫若氏ということになる。

今月は、日中友好に橋を架けた科学者にして偉大な詩人、文学者、歴史学者郭沫若氏のことを振り返って見たい。

さて、郭沫若氏は、1892年（明治25年）11月16日、四川省楽山県沙湾鎮で生まれた。蛾眉山や摩崖大仏も近く、父は地主兼商人という富裕な家庭だった。毛沢東は、翌年湖南省で生まれている。

額縁・洋画材料・デザイン用品
大崎周水堂
(271)1696

命が起こった。この時開貞数えの20歳、成都の高校生で、大きな希望を持ったが、結局軍閥が権力を持っただけだった。

1914年（大正3年）1月から約10年間23歳から32歳まで、彼は日本に留学する。まず東京神田の日本語学校に入り、さらに一高の特設予科を経て、岡山の六高の課程を修了し、九州帝国大学の医学部に入学、全課程を修め卒業した。

岡山時代、友人の見舞いに訪れた東京の病院で、そこの看護婦安娜（あんな）（本名佐藤をとみ）を知り、愛し合って結婚し、3児をもうけた。

1923年妻子を連れて帰国し、上海で文学活動にのめり込む。24年には、川上肇の『社会組織と社会革命』を翻訳し、マルクス主義に近づく。26年には広州に移り、中山大学の文学部長に就任。

この年の7月、国民党と共産党の合作による国民革命軍は、北方の軍閥を打倒するため、広州を出て、いわゆる「北伐」に向かう。郭沫若も北伐に参加した。

北伐は、半年で揚子江流域まで達したが、共産党の伸張に危険を感じた国民党

本名を郭開貞といい、沫若は、近くを流れる、沫水、若水から取った号である。母に教養があり、幼い開貞に唐詩を暗唱させたという。

1911年、清朝を転覆させた辛亥革

特許料理
大阪屋
創業大正15年
和・洋料理
Japanese Restaurant

フラワーズ
Ohama
九州種苗株式会社

右派の蒋介石が、27年4月、上海でクーデターを起こした。

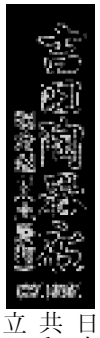
28年2月、身辺に危険が及んだ郭沫若は、上海から日本に亡命し、内山完造、村松梢風を頼って千葉県市川に居を定める。苦しい生活の中で、考古学、古代文字の研究に没頭し、優れた成果を残す。

37年（昭和12年）7月7日、蘆溝橋事件が発生。中国に対する日本の侵略がエスカレートしていく。7月25日早朝、郭沫若は、特高警察の目を逃れるため、下駄ばき、和服の散歩姿のまま、妻子にも告げず、そのまま日本を脱出し、上海に戻った。郭沫若46歳、安娜43歳、四男一女の子供がいた。

38年日本軍は武漢を占領。武漢にいた郭沫若は、国民政府とともに重慶に向かい、40年から新たに成立した政治部文化工作委員会の主任として、抗日宣伝工作を担当した。

45年8月、遂に抗日戦争は終わった。しかし、間もなく内戦が始まり、郭沫若は重慶を離れ、上海で内戦反対と新政府樹立の運動を進めていたが、国民党のテロを警戒して香港に移った。

48年12月、人民解放軍が北京に無血入城。郭沫若も北京に入り、49年10月1日中華人民共和国が成立した。



戦後は、政治協商会議に無党派代表として出席、新中国の成立とともに、政務院副総理、中国科学院院長に就任。50年全国文学芸術連合会主席、54年全人代常務副委員長、58年に共産党入党、63年に、中日友好協会名誉会長に就任。

1955年12月、日本学術会議の招請に応じ、新中国の文化・科学界代表者たちが、郭沫若氏を団長として、日本を訪問した。日本はまさに18年ぶりだった。

羽田空港には、茅誠司氏、南原繁氏始め、約400名の人々が出迎えた。

訪日招請は、当時日中間の国交はなく、色々な人達の努力によって実現した。郭氏の母校九州大学でも、山田穣学長を実行委員長に、菊池勇夫元学長、留学生の世話をした小野寺直助元医学部教授などが力を合わせた。

12月16日、訪問団は広島から福岡入りした。樋口謙太郎九大教授が広島まで出迎えた。郭氏にとり、32年ぶりだった。ホテルのロビーには同級生の瀬尾愛三郎九大医学部教授や操坦道医学部長が待っていて、しばし再会を喜びあった。郭氏は後藤七郎教授、赤岩八郎教授、中山平次郎教授の消息を聞いた。そして、翌日85歳の恩師中山先生を見舞った。

郭氏が九州大学に来たのは、当時新しい医学校だったこと、昔から日中往来の都市だったことなどあげた。しかし、耳が不自由で医学を諦めた。太宰府天満宮などの名をあげ、自分が文学の道に転向した土地も福岡だと述べた。家があった深い緑の箱崎松原を懐かしんでいる。

福岡で詠んだ詩で、「昔は銅像があったのに、今は寺さえなくて、砂浜ばかり」と嘆いているが、大仏の台座や寺院（称名寺）は昔のままである。文学的表現であろうか。

博多での最後の夜の宴は「新三浦」の水炊きだった。

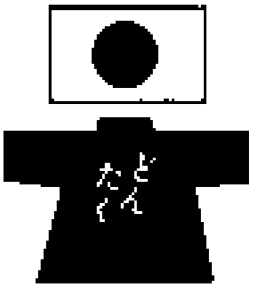
詩人郭氏は筆を取り、

花常好　花常に好く（美しく）
月常円　月常に円かに（まどかに）
人常寿　人常に寿なるを

と書いた。

郭沫若氏は、多くの人々と旧交を暖め、また新しい友人を得て3週間の訪日を終え中国に帰って行った。

郭氏に、人間的弱さを指摘する人もいる。文革の時、「自分のしたことは間違っていた。作品は全部焼却すべきだ」と自己批判したこと、安娜と子供を捨て中国で新しい女性を伴侶にしたことの2つ。

だが、この稿では、そのことを論ずる余裕はない。日中友好のため身をもって貢献した1人の中国人、郭沫若の歩んだ道を、振り返りたかったのである。

郭沫若氏は、1978年6月12日、北京で亡くなった。